

(目的) 住宅に関する消費者問題の1つに「注文内容と引き渡し内容との間のくい違い」がある。この原因として、住宅平面図から想像する住宅と出来上がった住宅との間にギャップを感じていることが考えられる。本研究では、このギャップを縮める手段として「縮尺模型」を用い、空間評価における住宅平面図と縮尺模型との関連性について検討する(実験1)。又、縮尺の違いが空間評価に及ぼす影響についても検討する(実験2)。

(方法) 実験1の評価対象は、住宅の一室を取り上げ、その「住宅平面図」と平面図をそのまま立体的にした「上からみた模型」、直立して見る「横からみた模型」の3対象とした。実験2の評価対象は、縮尺1/10, 1/20, 1/50の3種類の「上からみた模型」とした。評価方法は7段階のSD法を用い、33の評定項目について48名の被験者に評価させた。評価対象については、カウンターバランスをとり、データの交絡が起こらないようにした。

(結果) 実験1の因子分析の結果、平面図と2種類の模型の評価に関して3因子を抽出し、第1因子を快適性、第2因子を活動性、第3因子を様式と意味付けた。実験1の各対象間比較の結果、空間の総合的な判断を要する快適性と住様式については、平面図と縮尺模型との間で有意差がみられた。「上からみた模型」など視点が下方向の評価対象は活動性が小さくなることが明らかになった。実験2の因子分析の結果、3種類の縮尺模型の評価に関して3因子を抽出し、第1因子を活動性、第2因子を快適性、第3因子を様式と意味付けた。実験2の各対象間比較の結果、空間の快適性について、1/20の模型と1/50の模型との間で有意差がみられた。実験1,2共に男女差はほとんどないといえる。